# 女性の強迫神経症[[1]](#footnote-20)におけるペニス羨望の意識化[[2]](#footnote-21)の治療的影響

**モーリス・ブーヴェ**

〔前略〕

## 観察

### 臨床的記述・既往歴

この分析の断片を報告するにはどうしても時間がかなり必要となってしまうので、我々はあなたがたにかなり要約された形でルネの病的現象と家族状況の予備的な報告を提示することにする。

ルネは50歳くらいの女性で、健康な、二児の母であり、医療補助の仕事についていて、我々が少ししか情報をもっていない二年間の分析を最近受けている。我々が知っているのは、彼女が激しい感情を医者に持っていたが、それをなかなか表に出さなかったことや、治療をさまざまな言い訳で中断していたことである。さらに、治療に入るとすぐに強迫的な現象が減少し、非常に重要な改善が見られたことも、彼女のこの姿勢を後押ししていた。しかしそれは治療中断後しばらくして再び現れるようになった。

彼女は来院したとき極度の不安状態にあったため、我々はすぐに治療を行わなければならなかった。しかし定員超過につき、週二回しか受け入れることができなかった。

彼女は宗教的テーマの強迫観念で苦しんでいた。彼女は祈りたいと思うやいなや、あるいは自発的にさえ、自身の信条と抑えがたく形式的に矛盾するような侮辱的な言葉や糞尿にかんする言葉が自らに課された[[3]](#footnote-22)。そのうえ彼女は想像力豊かに男性生殖器を想像したが、それは幻覚性の現象ではなく、ホスチア[[4]](#footnote-23)〔ミサで拝領する聖体のパン〕の代わりだった。彼女はその想像の病的な性格を認めようとしないわけではないにもかかわらず、これらすべてに地獄の罰へのはげしい恐怖をもって反応した。この状態が悪化したのは彼女が意図的に自身の出産の可能性を減らそうとしたときだったが、しかしそれは彼女の結婚から始まっていた。彼女の強迫観念の主要なテーマが宗教的なものであることを説明する、次の重要な詳細を指摘しておく。すなわち、ルネのカトリック教育には彼女の母が一人で責任を負っており、ルネの母との対立は、義務や強制の性格をもつにすぎなかった精神的活動へと転嫁されざるをえなかったのである[[5]](#footnote-24)。彼女はさらに他の強迫的現象を同時にまたは単独で呈したことがあり、したがって7歳くらいから病気であると考えられた。

以下は彼女の主な強迫観念のリストである。

* 梅毒に感染したのではないかという頭から離れない恐れ。これは長男の結婚に反対することを招いたが、無駄に終わった[[6]](#footnote-25)。
* 宗教的強迫観念と混じり合った、幼児殺しの強迫観念。彼女自身の子供は対象でなかった。
* 家族の毒殺の強迫観念。爪切りのカスが食べ物に落ちたり、あるいは単に指が食べ物に触れたり、さらには指が布で保護されていてもパンに触れたりすることによる毒殺の強迫観念。
* 思春期においては、父の首を絞めるという強迫観念、母を刺すために両親のベッドに留め針をまくと言う強迫観念[[7]](#footnote-26)。
* 7歳のときには親の安全に関する恐怖症が現れた。この恐怖症は、例えば両親が家にいるかどうか確認するといった単純な論理的防御によって緩和された。

このような考えに対して、この患者は防御的な手段を用いる。そのうちのいくつかは、例えば点検、慎重さなど、見た目はまだ論理的である。他のいくつかは率直に言って魔術的であり、取り消し〔annulation〕ということに要約される。子供のころは、アパルトマンの幅木を三回触ることで「取り消し」ていた。後になると、「いいえ、そんなことは考えていない」と三回繰り返すようになった。

このリストをざっと見るだけで、これらの幻想が膨大な攻撃性に裏打ちされていることが十分に理解される。さらに、古典的なことだが、攻撃性は防衛の手段そのものに浸透している。女性の去勢コンプレックス[[8]](#footnote-27)に悩むこの女性は、ファルス所有の欲望を「呪術的呪文の三重の反復」という象徴的な様式で再確認することによって、去勢という攻撃的な思考を打ち消すのである。

### 彼女の家族状況

我々はあえてエディプス的とは言わない。というのも、性器的な組織化は存在したとしてもきわめて脆いものだからであり、また、分析では今のところ、男性の性的攻撃が恐ろしいサディズム的な様式において表象されるような夢を見つけるのでやっとだったからである。

一見したところでは、エディプスが正常に見えていた。ルネは自身の父を称賛していたし、自身の母については最も執拗な憎悪をあからさまにしていた。しばらくして、両親への両価性が明らかになり、ついにはエディプスが完全に反転して現れた。この女性は完全に自身の父に同一化しており、彼女の感情的生活の全体はただ母にのみ集中していた。実際、彼女は父の状況に対して厳しい批判を浴びせていた。父は憲兵班長〔下士官〕であり、少女だったルネはこの地位を恥じていて、仲間たちの前で屈辱を味わった。父の性格：彼は善良ではあったが、それを示すことができなかった。彼は陰気で無口で落ち込んでおり、母の厳格さに対して理解と愛情のある態度によって釣り合いをとることはまったくなかった。家庭内の状況：父は妻のプラトニックな初恋への執着に打ち勝つことができず、嫉妬していた。彼がその沈黙を破るときには、結局は必ず彼の負けに終わることになる激しい場面を引き起こすだけだった[[9]](#footnote-29)。

実際、この非難の後には、より重要な、非常に大きな攻撃性が隠れていた。この患者は例えば次のような彼女の父の去勢の夢を生み出していた。「私は叔父（父の兄）の遺体安置室に入った。それは吐き気を催させるものでした。私は腐敗の只中にある彼の生殖器を見ました」。提示された連想は父の死の状況にしか関係しておらず、それは何の感情もなく述べられた。「私の父は私の内的生活においていかなる場所も占めていません」と彼女は言った。ところがそれは正確ではなかった。というのも、最近になって、加害者が人殺しとして振る舞う悪夢という形で恋人を追い求める夢が明るみに出てきたからだ。これについては後で言及する。したがって、彼女はある発達段階では父に魅力を感じていたが、それは全体として前性器的様式においてであった。

母に関していえば、分析的調査は当初、患者が母に対して否定的感情を抱いていることを示していたが、しかし母に対する情熱的な感心が明らかになるのに時間はかからなかった。確かにルネは、母が自分を束縛し、激しい懲罰を与え、自己表現を妨げ、どんなに罪のない男性との関係も禁じたことを激しく非難したのではあるが、しかし彼女はとりわけ、自分を十分に愛してくれなかったこと、7歳年下の妹をつねに贔屓にしていたことで母を恨んでいた。ルネの嫉妬の感情は消えず、彼女はただ、明らかに母が妹を好んでいるという確信を無神経に放棄するだけだった。

しかし、母に対するルネの不満のこの激しさこそが、彼女が母に持っていた大きな愛情の証だった。彼女は、母が父より高い階層に属していると思っていた。母は父より頭がよいと思っており、とくに母のエネルギー、性格、決断力、威厳に魅了されていた[[10]](#footnote-30)。母が稀にくつろいでいたときには、彼女はいわく言い難い喜びで満たされていた。しかし、これまでのところ、母を所有したいというはっきりと性愛化された欲望は問題になっていない。ルネは母ともっぱらサド・マゾヒズム的な次元で結ばれていた。するとそこでは母娘の同盟関係が生まれ、ここできわめて厳格に働いたので、あらゆる契約違反が極端に激しい動きを引き起こした。これは最近に至るまで一度も対象化されることはなかった。この結合関係に介入してくるようないかなる者も、死の願望の対象となった[[11]](#footnote-31)。このことは、妹の死への欲望に関連する夢ないし幼児期の豊富な資料が示すとおりである。

我々はここで彼女の既往歴の綿密な分析に進むことができず、彼女が両親に対する態度の本質をその感情生活の行程の全体の中で明らかに再現していたのを示すことができないのは残念である。その前に、彼女が3歳くらいのときに受けたという、その現実性については何とも言えないトラウマを紹介しよう。それは、ある男性が腕に彼女を抱えて彼女の性器に触り、それは彼女に激しい恐怖を激しい気持ちをもたらしたというものだ。それを彼女は何の感情もなく語った。彼女は幼児期から青春期にかけて、同年代の男の子に対して真に対象的な感情を抱くことはなかった。

反対に彼女は、生涯を通じて、女性たちに対する熱烈な友情を抱いてきた。幼児だった彼女はまず、「外陰部に小さな棒をつける」とか、「年上の少女から浣腸をしてもらう」といった性的な遊びをした。これは彼女に非常に生き生きとした快感をもたらしたものであり、彼女はそれについてとてもはっきりと記憶に留めていた。しかし何よりも、青春期に、彼女の家の近くに宿営していたアメリカ人看護婦にかなり激しい情熱を抱いた経験がある。この友情が性愛化されたものだったと考える根拠はないが、あらゆることがこの友情が強烈なものであったことを示している。ルネは、完成されたタイプの良き母親として彼女を理解し、彼女を愛し、対等のものとして扱ってくれたこの女性のそばにいてとても幸せだった。その後、看護婦がいなくなると、ルネはこの種の関係を、一般に年上の友達たちと結び直していった。

ルネの結婚は都合と利益の結びつきだった。ルネの夫は教授だったが、とくに予備役の将校だったことが彼女を満足させた。それは父が憲兵の下士官だったという状況が彼女に引き起こした個人的な劣等感を打ち消すものだった。そのうえ彼は、自らを強力な男にして彼女を怖がらせるかもしれない長所を、非常に女性的な心理的特徴で打ち消していた。彼は優しく、とても善良で、とても献身的であり、ルネは漠然と、彼は彼女を決して支配していないと感じていた。しかし彼女は、自分の不安やさも優しそうな要求によって、あらゆる点で夫を完全に去勢することに成功した。一方で、夫の日々の行動には、彼の母親に対する彼の受動性とよく似た、意志や自発性の明らかな欠如があった。結局のところルネは、母に対するのと同じような典型的な両価的な態度を夫に対してもとり続けていた。

子供に関して言えば、二番目の子は母ルネの分析のおかげで学業に支障をきたすような仕事の妨げから徐々に逃れた。長男は際立った個性から、職業的な観点からとても素晴らしい成功を収めていた。長男は幼少の頃、その強い個性を感じ取った患者に対してパニック的な恐怖感を与えてしまった。ルネは長男と二人きりになる勇気はなかった。この少年はとても若くに結婚し、母の重圧から逃れることができたのではあるが、しかし彼は母ルネに対して氷のような無関心を示し、彼女はそれに大いに苦しんだ。また何より彼は、彼の若い妻に対しても神経症《ノイローゼ》的な振る舞いをしていた。

## 分析

この分析は14ヶ月間継続され、現在も進行中であるため、ここではその簡単な概要しか与えることはできない。我々の意図は何より、この観察の重要な要素、より正確には、転移と夢の研究を強調することである。

当然ながら一つの分析をいくつかの期間に分けることはまったく恣意的ではあるのだが、しかしここでは二つの段階が多かれ少なかれはっきりとしているように思われる。第一段階は本質的に対立の段階であり、その間なにも変化しないように思われた。第二段階は、転移についても、患者の心理学的構造についても、本質的に進行性の段階である。ファルス[[12]](#footnote-34)の所有[[13]](#footnote-35)に対する無意識の欲望を表す夢の解釈によって、一方から他方への移行が決定づけられたように思われた。

### 対立の段階

当初の状況はあまり満足のいくようなものには思えなかった。この女性はきわめて不安であり、すぐに治療してほしいと要求していたが、明らかに、自分が治療されることに承諾した条件を分析家に押しつけようとしていた。我々の態度はきわめて確固としていると同時に思いやりのある共感のこもったものだった。逆説的な同じ現象が我々とともに繰り返された。数回の治療のセッションで彼女の宗教的強迫観念を解除するのに十分だったが、同時に、彼女自身が心を打たれずにいられないほどはっきりとした形で医師への反発を示した。彼女は次のように言って話を遮るとき以外はほとんど全体で沈黙を守った。「何も話したくありません。ひどく侮辱的で、下劣で、滑稽です。お医者さんが仲間うちで患者を馬鹿にしているのはよく承知しています。あなたがその法則を免れる理由もありません。それに、あなたは私よりも学識がありますものね。あなたは私の純真さを馬鹿にするでしょう。女性にとって、男性にお話しするのは不可能なのです」[[14]](#footnote-36)。実際、彼女は強いと思われる男性に対する気持ちをごく一般的に、劣等－恐怖感と表現していた。この時点で我々は思い切って仮説を立てることができた。やっと始まったばかりの分析がなぜこのような驚くべき結果を生むことができたのか、その理由は見当たらないと言おう。すなわち、彼女が身を委ねていたこれらすべての独立の表明は、最終的には神とその法に対する反逆の感情、彼女自身がその存在を認めていた「情動」を表しているようなすべての言葉の強迫観念へと置き換えられた、ということを認める必要があるのだ。さらに彼女はほどなく、自身を恐怖でいっぱいにするような或るまったく独特な強迫観念を我々に明らかにした。しばしば、彼女が自分の夫に対する怒りをきちんと表現したとき、彼女は「もし夫が神だったら？」という予想外の思考にとらわれたのである。このように、ルネにとって、彼女とともに住んでいる男と神の間には確かな類似性があったので、この中間的な繋がりによって、我々の提案の妥当性を彼女に簡単に分からせることができた。もし彼女がすべての敵意を我々に集中していたとしたら、彼女は自身がいつも反抗しているところの対象から逸れていってしまっただろう。しかし、治療を続け、我々に対する彼女の感情がすこしだけ攻撃性が和らいでくると、彼女はふたたび宗教的生活の中で侮辱的で糞尿趣味的になった。何が起こっているかについてはとてもよく理解できていたが、我々に対する刺々しさがはっきりと薄らいだのはもっと後になってのことだった。数か月の間、彼女は黙ったままであり、不平を言うためにしか口を開かなかった。男性に対するこうしたいつもの反感に結び付いたのは、とても重要でかなり特異な不満の種だった。すなわち、彼女は、我々が彼女から金を取ったと非難したのである。実際、謝礼の支払いは彼女が解決するのに最も苦労したことの一つだった。我々は終わりを決めずに治療を延長できるような金額を慎重に決めようと努めたが、しかし彼女の予算を考慮すると、それは彼女にとっては本当に困難であり、結局は外的現実からの一種の絶え間ない圧力を成すものであって、彼女が無意識にかなり掴んで離さなかった敵意の沈黙の行使を際限なく引き伸ばさないよう、話をすることを促すものであった。この貨幣的犠牲は、彼女がセッションを欠席したときには、不可抗力だという偽の事由を持ち出しては何があろうと逃れようとしたものだった。その口実を我々は決して受け入れず、その無意味さを彼女に示すようとても気を配ったのだが、この貨幣的犠牲は女性らしい媚態的な数多くのアクセサリーを買うことを不可能にしていたので、よりいっそう我慢ならないものだった。「あなたが私の劣等感を増大させるのは、私が他の人と自分を比べて、私がちゃんと着飾れていないことに苦しんでいるからです」と彼女は言った。彼女は我々の要求額を罰として、あるいはよくても一種の力の衰えとして感じており、自分をよく見せることができなかった。彼女の男性に対する敵対的な態度を知っていた我々はすでに、彼女の行動を、男性によって課せられたルールに従うことを拒否していると解釈していた。そのため、当然ながら我々は、これほど強く感じられる「気に入られたい」という欲求について思いつくことを尋ねることになった。返答は我々の予想と合致した。「私がきちんとした身なりをしているとき、男性たちは私を欲しがりますが、私は本当にとても喜んで、「ほらまた、むだ骨を折ろうとしている人たちがいるわ」と思います。私は、彼らがそれで苦しむかもしれないと想像して、満足します」[[15]](#footnote-37)。このように、彼女の衣服への執着は、彼女の男性に対する憎しみの様々な側面の一つにすぎない。このとき患者は、神への宗教的強迫観念の表出と、彼女の夫への行動障害と、最後には彼女の分析の拒否とを、完全に同等の物として結び付けた。というのも、実際のところ彼女は、とりわけ「何も言わない」ということを明確にするためにセッションに来ていたからだ。彼女は、我々も知るように「治った」と言って何度も治療を中断しようとしていたが、これまでの改善の欺瞞性を思い知らされ、また我々の正式な忠告にもかかわらず治療を中断した場合は我々はふたたび治療を続けることはないという強力な断言を前にして、逃げ出す計画をあきらめた。彼女はこのとき、自身の意志を我々に押し付けられないことでどれだけ彼女が苛立っているかを示す些細な恐怖症を生み出した。すなわち、「もし私が自殺したり死んだりしたなら、お医者さんは殺人罪で告訴され、有罪判決をもらうことになってしまいます」。この幻想は恐怖という形で思い描かれた。彼女はいつも治療の金銭的負担について文句を言っており、自分に買うことができたであろうものすべてを満足げに列挙し、靴を手に入れたいという欲望に絶えず立ち戻った[[16]](#footnote-38)。彼女の言によれば、男性たちは靴を履いている女性の視線にとても敏感だということだった。

そして、治療開始から5カ月目にかけて、ようやく分析が進み新しい道に踏み出すことができそうな次のような夢が現れた。「私が勤め先の病院の部局にいると、勤務中に母がやって来て、監督の女性に私の悪口を言います。私は激怒して出ていきました。私は病院の向いにある靴の修理屋の店に入って、靴を一組買いました。そして私は突然窓を開けて、母と局長の男性を激しく罵りました」。我々は彼女の母に対する感情をすでに知っている。また、彼女は不公平だと思う監督の女性を嫌っており、あえて返事をしないのだと我々に語った。選んだ靴は先がとても尖っていた。そのあと彼女は、父の靴の修理についての脱線した話題に入った。続いて彼女は、若く褐色の髪の男で、我々にどこか似ているところがないわけではない靴の修理屋について話しはじめた。局長の男性については、（彼女の父のように）とても公正であるため愛されていると同時に、その評判と彼を取り巻く組織ゆえに恐れられてもいた。そのあと我々は彼女に、夢の最初の段階では彼女は母の不当な仕打ちに耐えるだけだったのが、靴を買った後には公然と反抗できるようになった、ということを指摘した。ところでこの靴というアクセサリーはまさしく分析が彼女から剥奪したものだった。そのうえ、彼女が金を渡した靴の修理屋は分析家にとてもよく似ていた。したがって明らかに、彼女は分析家から、彼女の考えではそのあまりに厳しい教育が病気の原因となったところの母への恐怖から解放してくれるような何かを得ようとしたのであり[[17]](#footnote-39)、そしてその何かとは明らかに、彼女に父の靴を思い起こさせるような靴によって象徴化されていたのである。我々はその日はそれ以上進むことはなく、女性の衣装のこの同じ部分が劣等感の克服に役立ち、ちょっとした反男性的な復讐ができたのだと付け加えるだけで満足した。

我々は心中では、この夢がファルス所有の欲望を表していると考えていた。ちゃんと靴をはいた足が強いファルスを代表していた。この器官を所有するだけで彼女は力を授けられ、母への絶対的な服従という幼児的状況を逆転させることができ、今度は自分が支配的な位置を占めることができた。もちろん、この夢にはより正確な意味があったかもしれない。夢で明らかになった父への同一化の欲求は、より性愛化された母の支配の欲望の存在を予見させえたかもしれないのだ。しかし、それに続く分析はこの類の仮説をはっきりと補強することはなかった。患者は母の生殖器の所有という幻想を生み出すことは一度もなかった。

いずれにせよ、夢の内容はまさに、我々が彼女にその存在を感じ取らせたような内容であった。間もなく彼女は、彼女を驚かせた二つの夢の幻想を我々に報告した。「自分の乳房の片方が陰茎に変わっているのを見ました。これは奇妙です。昨夜も私は自分を見ましたが、今度は二つの乳房の間に陰茎があるのが見えます」[[18]](#footnote-40)。しかも彼女は、男性的同一化の欲望が男根的所有とともに、そして母との関係の一環としてのこの欲望の意味作用が明らかに表現されている二つか三つの他の夢を作り出すことに成功した。その一つの例を挙げる。「私は靴の修理屋で靴を直してもらいました。それから、青、白、赤の紙ちょうちんで飾られた舞台の上に登りますが、そこにいるのは、みんな男です——私の母は人ごみのなかにいて、私に見とれています[[19]](#footnote-41)[[20]](#footnote-42)」。

このような資料の助けを借りて、彼女の異性の典型例との関係や、明らかに非常に擬人化された形で考えられた神との関係を、まだ表面的な方法ではあるが分析することが可能になった。彼女は次のような幻想を持ってきたのではなかったか。「キリストの頭を足で踏み潰す夢を見ました。そしてその頭はあなたの頭に似ていました」[[21]](#footnote-43)。そして、連想では次のような強迫観念を持ってきた。「私は毎朝仕事に行くのに葬儀屋の前を通りますが、そこには、四体のキリストの十字架像が陳列されています。私はそれを見ながら、彼らの陰茎を踏みつけにしているような気になります。私はある種の鋭い喜びと、それから不安を感じるのです」[[22]](#footnote-44)。

このように、分析家から提供されたペニスを持ちたいという願望には、その医師の器官を破壊するという幻想が伴っていた[[23]](#footnote-45)。踏みつぶされた頭部とは陰茎に他ならず、連想で喚起された強迫観念は、それが攻撃性の直接の対象であることを示していた。

このとき、彼女は特に敵対的で、怒りっぽく、ときに糞尿趣味のようなものを見せたが、しかし少なくともこの時、彼女のわずかな攻撃性の発現を解釈するためにあらゆる注意が払われたにもかかわらず、医師を直接去勢するという他の幻想は表出しなかった。

すべての男はアプリオリに敵対者であり、ルネが恐れ、劣等感を抱く敵であり、さらに、彼女は男と交わることを禁じられている。そうした恐怖や劣等感を、ルネは進んで母のせいにしている。母は彼女が危険だと考える男の子との付き合いを禁じていたのではないだろうか。そして、母はルネに健全な人間関係を持たせないことで、彼らと競争することも、女性としての役割を簡単にこなすこともできないようにしていたのではないか？「母は私に、彼らは危険だ、用心しろ、親密な関係、友人関係をもつことすら不道徳だ、と言いました。彼らと一緒にいることを許されず、そのことを習慣にしているのだから、どうして安心などできるでしょうか」。

しかし、これらすべての背後にあったのは、男性との対立のより深い理由だった。この対立は、富、知識、根性、力など、何か特定の特徴があるたびに明らかに最高潮に達するものだった。それらは彼女に、男はより際立って力を持っているものだと想像させた。分析が示したように、彼女はもちろん無意識のうちにだが、自分がいつも剥奪されているものを持つこれらの存在に対して、憎しみと嫉妬の感情を育んでいた。剥奪されたものとはペニスである。それは多くの幻想が示しているように、彼女の子供時代の心的現象が力の行使の本質的な属性を見たペニスであり、とくに、ペニスの象徴であるところの子供の破壊に関連している。「私が男だったら、男はこんなに楽な人生を送れるのに！」と彼女はよく繰り返した。しかし、このように痛切に感じられている女性の去勢コンプレックスは、本当に、乱暴な男性との不幸な関係の中で、その力の重さを感じさせられた結果生まれたものなのだろうか、という疑問がもたれる。先に報告した3歳のときのトラウマを除けば、彼女は男性からの強要に悩まされたことはない。彼女の父親は善良で、何よりも弱く、人格的な権威もなく、彼のために彼女が苦しまなければならなかったと推測させるものは何もない。しかも、彼女は両親の部屋で寝ることはなかったようで、父親の半裸を目にすることはなかったはずだ。しかし、少女がペニスへの欲求や他人のペニスを破壊する欲求を抱くのにこの種の実際のトラウマが必要でないことを、我々はよく知っている。彼女は実際のところ、現実の男性との長時間の対立を経験したことはなかった。この代わり、彼女の人生はすべて、母親との長い闘いだったのである。ペニスのある男性に向けられた攻撃性の大部分は、母親との不幸な関係に起因しているのではないだろうか？

ところで、それ以外の分析が示さなければならなかったのは、彼女が自分自身のファルス表象をもち、確かにとても強くて危険なものとして表象されている動物を見るという日常的経験をモデルとした性を彼女に帰属させたということである。

さらに、ルネが自分の乳房がペニスに変形する夢を現時点で完全に分析することができなかったとすれば、この変形はまさに、母性の本質的属性である滋養的器官と生殖的の力の器官の間の類似性がいかに大きいかを示しているのではないだろうか。もし彼女が自分の乳房がペニスに変形するのを見たならば、母親の乳房に対して原始的に向けられていた口唇的攻撃性を男性のペニスへと移し替えたのではないだろうか？

しかし、この口唇的攻撃性こそが結局は男性の去勢の原動力であるとすれば、この、母親から男性への攻撃性の転嫁が患者にとってどのように明らかになったかを示し続けることは我々にとって興味深いことであるように思われた。

### 分析の第二段階

彼女はファルスの所有に対する欲求を明らかに表明しているにもかかわらず、すぐには認めなかった。また、神や夫や我々との関係に対する我々の分析を受け入れたとしても、それでも、彼女の夢に対する我々の解釈にまつわる人為的で固有な恣意的性格についての意見を維持した。「男になりたいと思ったことは一度もありません」と彼女は言った[[24]](#footnote-47)。いずれにせよ、これ以来、彼女の分析における振る舞いが変わった。それは明らかに彼女の転移が変化していることを意味していた。それは最初はほとんど目立たず、彼女の非難的な態度が止まったことだけに反映された。男性分析家に対する偏見がなくなったかのように、自分の立場が屈辱的だ、怖い、不当に金を与えていると繰り返すことはなくなった。その一方で、彼女はほとんど無言に近い状態だった。彼女は、夫への去勢行為の攻撃性を証明するいくつかの夢を提供することができた。このとき、彼女は父親に対する死の欲望を外在化し、絞殺の強迫観念の記憶を取り戻した。我々に事故が起こるのではないかという恐怖症もまたこのときからである。これは死の欲望の明白な表現である。少しして、もう一つの顕著な進歩が、非常に目立たない形で表れた。抵抗の言語表現が変わったのである。彼女はもはや「話したくないです」とは言わなかった。彼女は「話せません、何が話すことを邪魔をしているのかわかりません」と言った[[25]](#footnote-48)。彼女が激しい内的な議論にさらされたことは確かある。彼女は疲れ、震え、頻脈になり、しばしば汗まみれになってセッションを終えた。復活祭の義務に起因する現在の葛藤を機に、彼女は人間、神、神格化された聖母に対する反抗の類似性を意識するようになった。そのとき彼女は言った。「私は、男であろうと女であろうといかなる方面からの強制も嫌いです。聖母に向けた侮辱は、確かに母のことを思っていましたが、あえて自分に向けては言いませんでした」。

このとき彼女は、聖母が子供だけを思う理想的な母親であると同時に、父が信仰を告白するところの非常に性愛化された女性である夢を見た。

ごく限られた期間だけ話題になった復活祭の問題が聖体拝領の義務の時期が過ぎて激しさを失ったこともあり、また分析的な説明や解釈がなされたこともあり、少しずつ嵐は静まりつつあった。転移は、非常に小さな兆候からわかるように、その攻撃性はかなり失っていた。

当初、分析家は敵であり、夫に成功した去勢術をすべて試された。その後、ペニス所有の欲望とそれに伴う去勢攻撃性が意識化されると[[26]](#footnote-49)、すべての男性と患者を隔てる溝が一部埋められることになった。男性は味方になった。患者は、もう拒否することなく、「話したい」と言った。しかし、彼女は意識的な決意よりも強力な内的な力に立ち向かい、エネルギーと粘り強さで戦っていた。この協力関係の実質的な成果はおそらくまだあまり顕著ではなかったが、分析家と被分析家の方向性はそれと違って、さらなる発展を予感させるものであった。基本的には、ペニスへの欲望と、その意味するところが明らかになっただけで、それ以上のことは何も起こっていない。男性－分析家は、支配し、脅し、嘲笑する存在としての性格を、少なくとも部分的には失っていた。男性－分析家は好意的になった。男性は彼女と話すことが禁じられているのだから、男性－分析家が相変わらず禁じられているのは間違いないが、幼児的な女性的超自我の禁止は、分析的なイマーゴと歓迎する母親のイマーゴとの間の著しい混同が予想されると同時に、それほど厳格なものではなくなった[[27]](#footnote-50)。ここで、最初の夢の形象を紹介する。まずその前に、うつ病にかかった義母との和解の夢について述べておこう。ルネの義家族は間接的に事故の原因を彼女になすりつけたのだった。「Xさんは……老婦人にお礼を言うために一緒に行こうと言っています。私があなたの家に行くことを知ったら、彼女は何と言うでしょう。私たちはそこに行きます。私を受け入れてくれているのは、あなたです。普通の会話をしているのであって、分析をしているわけではありません。私はとても幸せです」。

ここでは、彼女の交友関係の詳細をお伝えすることはできない。この夢の中で彼女は、フランスに蔓延するカルト教団の牧師と結婚しながらも宗教的な問題では独立を保っている女性、X女史と自分を同一視したいと願っている。

分析家のイメージについて言えば、それは正常な関係を築いている男性であると同時に、理解を示し、禁止的でなくなった母親のイメージでもある。これは少なくとも、彼女が分析家を表現するさいの二重の意味を示している。

復活祭の危機から1カ月足らずで、彼女の状態は大きく改善された。彼女は家族と一緒に、楽しそうに家の中を整え、すべてを塗り替えながら、幸せに暮らしている。彼女はこんなに明るい気持ちになったことはない。強迫観念は同じようにたくさんあるが、それに対する罪悪感はもうない[[28]](#footnote-51)。彼女は、話したくないという気持ちをいとも簡単に克服するようになった。彼女は、我々が上で要約したような多くの資料を持ち込み、正しい道を歩んでいると感じている。真の女性になるために「黒いペニス」を手放すことに同意するといった夢のように、より直接的に前性器的段階を代表する素材が現れ始めた。彼女はこんな夢を見た。「私はシャトレーの舞台にいて、自分の役がわからず、絶えずでっち上げ続けなければならない。私は若い人と一緒に遊んでいます。夕方には2回目の公演があるのですが、どうしたらいいのかわかりません。その合間にトイレに行き、特殊な形状の便を大量に排泄しました。私は安心感を感じて、いい演技ができました」。劇場の状況が愛の状況であること、青年が彼女の夫を象徴していること、そして排泄された物体がペニスの形をしていたことを知っていれば、これらすべては非常に明らかである。

しかし、この論文の中心は転移反応とその意味、そして心理的構造の修正、言い換えれば超自我の研究にあるので、夢の報告に戻ることにする。この夢は、前者と同様、攻撃的な欲動の対象である男性的イマーゴの両義性への疑問を弱めるものである。その理由は、彼女が全能の母に帰されるファルスの力を持つからである。

実際、これから述べる夢は、ファリック・マザー〔男根母〕との和解の幻想である。それは、ルネが分析家の手からファルスの力を受け取った、より正確に言えば、金銭的または肛門的な犠牲と引き換えにそれを受け取る権利を得たようなすべての夢を引き継ぐものであった。「私は仲間と一緒にいることに気づきます。仲間の中には試験を受ける人もいて、私が修了証を持っていないので、一人が意地悪く「勝負しろ」と言うんです。私は断りました。というのも私は同等の資格は持っているからです。私たちの女校長が助けてくれました。このとき、彼女が急にスカートを上げるので、私は大げさだと思いました。彼女の脚や太ももは真っ黒です。そのあと庭で、私がとても好きな同僚の女性が、花開いたリンゴの木の枝を私に手渡しました。私は「長い茎が好きです」と言って断っています」。この夢の意味を十分に理解するためには、連想されたことをある程度詳細に報告する必要がある。選抜試験によって卒業資格を得られなかったことは彼女にとってつねに心配の種であり、彼女は劣等感を抱き、どんなに励まされても、能力がないと判断されることを恐れている。女校長先生はとても協力的である。彼女はルネを支え、励まし、愛情を示す。黒い太ももは、悪い冗談でチュチュ〔バレエ衣装〕に巨大な陰茎を描いたカラーダンサーのポスターを連想させ、それが芸術家のものであるように思われたので、性器を見たことによるトラウマの痕跡を見つけようと我々が少し粘ると〔insister〕[[29]](#footnote-52)、彼女は我々にこう言った。「はい、この脚は憲兵隊〔ルネの父は憲兵班長である〕の馬のそれを思い出させます。その馬が勃起しているとき、何が起こっているんだろうと思いました。他に何も思い出せません。……いえ、小さい頃、他の女の子と一緒に陰部に小さな棒を入れて遊んだことがあります。それ以外のことは覚えていません」。こうして、ペニスの所有欲の起源、つまり力のあらゆる可能性をこの器官によって具体化することの起源が明らかになったのである。

夢の中の二番目はほとんど明白な意味を持ち、次のような連想を引き起こした。同僚は患者に愛された女性で、アメリカの看護婦のようにエネルギッシュでまっすぐで良い人である。りんごの木の枝は「微笑みの国」のとても優しい歌（咲いたりんごの木をつつく二匹のハトの絵）（子供の頃の記憶）を思い起こさせる。茎の長さが足りないということで、前回の性行為の時の反省が蘇る。彼女は夫に「でも、もっと入ってきて」と言う。このように、母は、この長い夢の最初の段階においてペニスで飾られている。第二段階では、彼女は非常に暗い庭から、不十分な象徴的な枝（小さなクリトリス）だけを受け取ることへと翻訳される。しかし、この夢は柔らかな癒しの雰囲気の中で行われ、葛藤が解消されて眠りにつこうとしている。彼女はまだ女性であることを受け入れていないとしても、宥和的な雰囲気を味わうことができる。しかしまた間違いなく、この夢は夫の陰茎を自由に自分のものにしたいという願望を不安なしに表現しており、これは女性の去勢コンプレックスの典型的な解決策である[[30]](#footnote-53)。

この分析家のイメージと母のイメージの混同[[31]](#footnote-54)は、去勢の色合いを帯びたはっきりとした陽性転移の夢によって客観化される。「私はあなたの家でセッションをしています。7、8歳のお子さんがいらっしゃいます。あなたはモリエールの医者のような黒い長いローブを着ていますが、尖った帽子はありません。あなたは私を所有するように、私の上に身を置きます。私はこれをごく自然なことだと思います。そして、ドレスを持ち上げて、「声を出せ！」と言うのです」。ここではいくつかの関連性を紹介する。黒いドレス：古典喜劇の医者のもの。浣腸：「10歳の頃、年上の女の子に浣腸をさせてもらって、本当に快感を覚えたことがあります。母はよく浣腸をしたものです。それに、いつも黒いドレスを着ていました。あなたとの性行為は私には普通のことだと思われます。少年について言えば、彼は私の息子です。ご存知の通り、休みの日に、私は息子とその若い奥さんとの間の不仲に気づき、私の厳しすぎる教育による神経症《ノイローゼ》のせいだと思いました。私はその奥さんに、私があなたの治療を受けており、それが効果を上げていることを告白しました[[32]](#footnote-55)。これはとても厳しい出費でした」。このようにして、彼女は女性であることの屈辱を感じなくなった。注意すべきは、この性行為が前性器的な様態で行われるということである。彼女の沈黙の多元決定もまた注目に値する。彼女にとって話すということは男性や男性化された母親に対する性的な服従に等しいが、にもかかわらずそれ自体とても罪の重い口唇的活動であった。次の夢は、口唇的な前性器的な出来事が多いにもかかわらず正常なエディプスの発達の傾向を示すような、とても可愛らしい夢である。「私は大通りにいます。イギリス国王が妻を腕に乗せて行列をなして通過しました。私は国王に、息子がこの美しい国にいることがいかに幸せかを伝えます。彼は私に感謝し、夕食に招待してくれました。私は彼の腕に抱かれて出発しました。女王は姿を消しました。私たちは小さな一軒家に到着しました。そのとき私は下僕たちの前にいて、さまざまな形の水晶が入ったワゴンを見せてもらっています。彼らは私にカップを選ぶように促します。私は彼らに、そんな気分じゃないと返します。そして共用スペースに行くと、母が洗濯をしています。彼女の白い髪が乱れています。私は彼女に「お母さん、靴を履きなさい、王様の宴会に来なさい」と言うのです」。そのとき、コート姿の女性から早くするようにと言われました。彼女は私に何か重要なことを伝えようとしています。その夢以来、私は不思議な喜びと自信を持つようになりました。病気はもちろん、宗教的な強迫観念も克服できそうです。昨日、教会で私は高い祭壇に歩み寄りました。20年間もやっていなかったんです。というのも結婚してからというもの、本当に性的な強迫観念があったんです」。

彼女は自発的に連想した。「王様は軍服姿の父であり、そしてまた、その特徴からしてあなたでもあります。言い忘れていましたが、私は小さな家の玄関でメアリー女王に会いましたが、彼女は私を厳しく見つめました。これは遠くにいるときの母です。その家は、結婚当初にずっと夢見ていた家です。花に囲まれた明るい家、プロヴァンス風の農家。受け取りたくないクリスタルについては、厨房の見習いコックの帽子を題材にした滑稽な歌を思い出します。大きいもの、小さいもの、四角いもの、尖ったものなど、ペニスを連想させるような性的な表現でパロディ化されているのを聞いたことがあります。洗濯をする母を見ていると、今の母の姿を思い出します。私は、母がどれだけ私たちのために献身的に[[33]](#footnote-56)尽くしてくれたか今まで気づきませんでした。母はずいぶん変わりました。母はいま、かつて悪いと思っていたのと同じくらい良い人だと思います。この前の休みは、私たちが楽しめるようにと、母が身を粉にして働いているのを見ました。よく考えてみると、自分を変えたのは自分自身でした。彼女はいつもそうでした。ただ、私は母の悪い面ばかりに悩まされて、母の良いところを感じなくなっていました。私は知っているし、あなたがそれを発見させてくれたのですが、私は彼女を何よりも愛していました。でも、彼女の権威主義には耐えられなかったし、ましてや私は無視されていると思っていました。コート姿の女性は、私の幼少時代の物語に出てくる妖精です」。

彼女はさらに付け加えた。「私は、今朝目覚めたときに感じた何とも言えない幸福な印象について強調したいです。目の前には明るく穏やかな人生が広がり、私はもう何も怖くなくなりました。私は、私が他の人たちと同じようだと感じました。というより、他の人たちを想像しているような感じでした。私はただ、家庭の中で幸せに暮らし、自分の居場所を確保し、夫や子供たちの愛情を享受したいだけなのです」[[34]](#footnote-57)。

見ての通り、この夢は、患者が性器的な陽性転移の道へと踏み出し、分析の第三段階が開かれつつあることを示唆しているように思われる。しかも、それは一連の夢の中で、彼女が攻撃的な表情を見せるものから恐怖で目を背けたいように見えるのと同時期である。いずれにせよ、この幻想の中では、彼女の母はもはや消えゆく存在でしかなく、「洗濯をする老婦人」であり、イギリス王の妻であり、王の腕を取ると消えてしまう存在なのだ。母はまだ威圧感があるものの、メアリー女王は彼女の入室を妨げない。この夢でも、彼女は王に向かって優しい言葉をかけることができ、王は彼女に行列の中の女王の座を与える。

この夢は、陽性エディプス的な欲望の誕生を表しているようだ。彼女はペニスの所有を放棄し、その義務である王の招待を受けるが、前性器的な衝動の持続は食事への招待に表れている。王との関係は食事的なものである。さらに、杯を拒否することの象徴性は明らかに複雑である。もし患者が自発的に、ファルスの力に対する自分の威厳を放棄したことの翻訳だと解釈するなら、それは本当にそうなのだろうか。それは、一部の分析家が望んでいたように、非常に包容力のある女性によって男性のペニスと同化したいという正常な欲求[[35]](#footnote-58)の表れであり、「くぼんだ」ペニスの象徴ではないか。いずれにせよ、母への執着が強いことは、母を王子の宴席に案内する必要性を感じていることからもわかる。

分析は進み、陽性転移は、非常に強く前性器的なエディプスの特徴をもって明らかになり[[36]](#footnote-59)、同時に、患者の男性に対する反応と母親に対する反応の並行性をさらに明らかにする材料も出てきた。これは、いくつかの夢の中から選ばれたものである（その日、彼女は母親と対立しており、このことは、彼女自身の攻撃性が一瞬爆発したことに対応して、この資料がより特別に適応された性格であることを、一部説明するものであろう）。「地下街で男に追いかけられ、怖くなった。その時、私がもがいて叫んでいたので、夫が起こしてくれました。その人はあなたです。こんなことを言わなければならないなんて、どれだけがっかりしているかわからないでしょう。私は自分を守り、反抗しました。あなたはその沈黙と強さで私を苛立たせます。ちょうど私の母のように。でも、私はいつもあなたのことを考えています。そんな危険で屈辱的な状況に陥るくらいなら、分析を打ち切ったほうがましです。自分を嘲笑う男を愛することは、自分を売春させることなのです」。この絞め殺そうとしたことが私に示唆しているのは、子供の頃、母の首根っこを掴んで、力いっぱい抱きしめたかったですが、母がそれを許さなかったということでしょう。——ああ！　私はどんなに彼女が嫌いなことか、私は父も絞め殺したいと思いました！」。この夢の中で、彼女は、子供の頃、母親と一緒に行使することを望んだのと同じようなサディスティックで愛情深い方法によって我々に扱われる恐怖を経験する。しかし、攻撃的な影響は、15歳の時に作り上げられた父親の首を絞めるという彼女の強迫観念の中にしか認識されなかった 。さらに彼女は付け加えた。「夫が寝てしまって、私に興味がないときは、殺したくなります。戦時中、私は母と寝ました。母が無関心だと、私は母のことも殺したくなりました」。そして、記憶の中で激しいサディズム的な強迫観念が戻ってくる。ここで、転移の総合的な解釈を試してみよう。

この患者が分析的状況で追体験する転移は、連続的ではなく漸進的に、つまり自信とくつろぎのレベルに向かって著しく振動しながら進展しており、これは当初は本質的に否定的な表現をしていたのとは激しく対照的であった。この研究が教えてくれたことを整理してみよう。第一段階では、ファルスの所有欲が意識化される前は、少なくとも見かけ上は、対立的な態度は完全に男性に向けられた。彼女は分析家に対して夫と全く同じような行動をとっただけでなく、この治療の段階の終わりには、父親と医師に対する攻撃性を完全に自覚していた。実際、このような敵対的な感情は、男性の行動がどうであれ自然に軽減されるものであり、これは父母の前での患者の心理的立場、すなわち父親への同一化とエディプスの逆転の結果であるだけでなく、こう言ってよければ、母親に対して原始的に感じていた攻撃的感情の転移であることは明らかある。この概念は完全に古典的であり、何度も客観化されてきたものだ。今回の観察でそのことは十分に証明されたと考えている。父親との同一性の欲求が夢の中で表現されると同時に（「自分をファリックな存在にする靴を分析者から受け取る」）、幼児的女性的超自我の抑制力の表現である検閲の厳しさが緩和されたことは、興味深いことであったと思われる。そのとき彼女は、聖母に対する侮辱の言葉の中に、幼い頃、自分の中でさえ実の母親に対して明確に考える勇気がなかったことを認識することができたのだ。このような結果を理解するために必要なのは、原初的な反母性的攻撃性が、分析家に、より一般的には、このような患者が親密な関係を結ぶ男性に投影されているという現実を見失わないことだろう。さらに、もしファルスの所有願望の想起が、ファルスの担い手である父親との同一化を可能にするのなら、医師への去勢願望の自覚は、ファリック・マザーに対する攻撃性からの解放に等しい。本発表の大部分を占めたルネの転移の陰性的な側面については、これ以上触れないことにする。ここで簡単にまとめておいたのはただ、分析的イマーゴの両義性が、患者の転移の陽性的側面と同様に、陰性的側面の分析にも現れることを示すためだけである。すでに十分に言及した、医師と母親の性格の夢のような凝縮に戻ることはしないが、転移の分析に関するこの小論の締めくくりとして強調しておきたいのは、これらのイメージが解離し、転移のエディプス的な方向と個人的な方向とが現れているように見えるときでさえ、男性に対する患者の反応がどれほど、母親との関係の図式に基づいて調節されているかということである。彼女はこう言う。「私はもちろん、私を愛し賞賛してくれる女性たちとの付き合いが私に与える完璧な幸福を、夫と一緒に経験したことはありません。しかし、私はあなたがた二人との関係において同じような立場にあり、母に会う前と同じように、敵対するのではないかと今でも恐れています。あなたがたの顔の表情はどうだろうかと考えます。開放的だと思えば気分が良く、明るくなり、塞いでいると思えば途端に意地悪になり、私の母のような厳しい冷たい目つきで、敵意を持つようになる自分を感じます。これは、今となってはあまり明確ではありません。あなたはいい人で、根本的に頼れる人だと感じているのですが、この愛という感情がいつも私を怯えさせていました」。

このようにして、この患者が異性愛の対象に対して満足のいくリビドーのはけ口を見つけることができない理由を、肉体の中に、生活の具体性の中に把握することができるのである。ペニスを持つ男は、その本当の態度がどうであれ、そして間違いなくファルス破壊の口唇的衝動が暴露され受容されない限り、つねに欲求不満で支配的な悪い母親の生き写しなのである。それは、母性的な固定観念の放棄に相当するこのような状況が、攻撃性という点で、また報復の法則にしたがって、母性の乳房の口唇、愛撫、破壊的な食欲をペニスに移し替えることによって破壊の恐怖を引き起こすからであり、このことが不安の本質的源泉として我々に見えてくるからである。この乳房とペニスのアナロジーは、ここでは男性化幻想の胸部への局在によって客観化されており、非常に重要な意味を持つと思われる。しかし、もし患者が、男性的権力と母性的権力の二つの形態の間に確立した類似性を自発的に表現した場合、この対応関係を強調することを目的とした解釈に対しては、「いずれにせよ、それは付随的なことです」といった種類の合理化で対抗する。

口唇的衝動の分析はつねに強い抵抗にさらされた。とはいえ、患者自身は、かなりの過体重であるにもかかわらず、これまで節制できなかった食欲の重要性を強調した。「自分を制限してしまうと、どうしようもない不安が生まれます」。彼女はこの症状とともに、しばしばホスチアの知覚を覆い隠すような男性器の幻視をもたらした。しかし彼女はこれに関連して、幼少期の二つの強迫観念を思い出しながら、ある種の分析への示唆を与えてくれた。「聖体拝領のとき、私は一日中、聖体の一部を口に触れるものに当てて汚してしまうのではないかという恐怖に取り付かれていました。なので、私はがつがつと一気に食べてしまいました」。ここでは、攻撃的な衝動が防衛手段に浸透していたのだ。その日、彼女は、排泄物に混じってキリストの体が捨てられることを恐れて、排便を遅らせた。しかし今ではそれを考えることに一種の喜びを感じるという。この肛門サディズムは、その意味を彼女はよく理解しており、もっと簡単に分析できた。彼女は、神、聖母、母親、医者に対して、自分の糞尿的な取り込みの攻撃的な力のすべてを感じているのである。この点で、彼女が浣腸ゲームにたとえた次のような強迫観念を挙げることができるだろう。「神父が「心を開いて」と言ったら、私は「肛門を開いて」と思うのです」。彼女の受動的な肛門性愛の象徴的な満足感。

分析が不完全であったにもかかわらず、ルネの改善は著しい。彼女の感情的な関係は極めてリラックスしたものになり、彼女は夫を愛することができるようであり、また、あまり囚われのない仕方で、夫がもっと男らしくなることを望んでいる。母親もまた、彼女の変化の恩恵を受けている。彼女は、厳しいながらも献身的な[[37]](#footnote-60)母親を見出し、理解しようとする。彼女はまだ攻撃的な暴発をすることがあるが、長くは続かない。しかも彼女は、息子のアンドレには自由な教育を施し、遊び方も知っていて、性の悩みも相談に乗ってあげている。長男に対しては本当に母性的であり、自分の責任と感じる神経症的な態度を正すために、病的な罪悪感を感じることなく、分析的な治療についてためらわずに話した。大抵の場合、彼女はとても幸せだと感じていて、客観的であろうとしている。彼女の宗教的な強迫観念はきわめて稀になった。彼女は頭の中を「駆け巡る」これらの思考を無関心に受け入れている。このように、強迫観念的な現象の残存物を不安なしに受け容れ、さらに外部にリビドーを投影する新たな可能性を持つことで、現在の改善には少なくとも相対的に安定した性格が与えられているように思われる。

1. 「これは、「［女性の］強迫神経症におけるペニス羨望の意識化の治療的影響」と題された、 一九五〇年の論文です。女性における強迫神経症の分析がそれほど多くないのと、神経症の性的特殊性の問題をおおまかに整理するのに貢献しているということから、この観察はたいへん興味深いものです。患者たちがどのような神経症の傾向を選ぶかは彼らの性に起因する理由からだと考える人たちは、神経症において構造の次元に属するものが、生物学的な意味における性的立場によって決定されるところがいかに少ないかを、ここで見ることになるでしょう。実際、男性の強迫神経症において役割を果たしているのが見られるファルス的対象のあの優勢さが、まったく興味深い仕方で、ここでも見出されます」（ジャック・ラカン『無意識の形成物（下）』p. 296。以下断りのない限り引用頁は同書から指示する） [↑](#footnote-ref-20)
2. 「意識化が強迫神経症の解決の鍵だと言ったところで、たいしたことを言ったわけではありません。すべては、このシニフィアンが出現し、しかも同等の役割を演じていない、そうしたさまざまな点においてそれをどう解釈していくかという、その仕方にかかっているのですから。あの観察のなかでは、女性患者とその夫との関係、分析家との関係、そして一般に他者たちとの関係を同一視することで——これは観察そのものによって否認されているのですが——**結局、男性とのある競争関係が問題なのだ、と言われたわけですが、そうした意味でのペニス羨望に、すべてを還元してしまうことはできません**。ファルスが現れるのが、こういう面からでないことは明らかです。それは、いくつもの点に現れるのです」（p. 363, 強調引用者） [↑](#footnote-ref-21)
3. 「［分析の］ほとんど最後の頃になっても、分析自体は続いていたように見えますが、患者はその強迫観念を、もはやそれに不安を感じなくなってはいるものの、すべて持ち続けている、と言われているということがあります。強迫観念は、分析によってすっかり認可され、そうして動かなくなってしまっています」（p. 306） [↑](#footnote-ref-22)
4. 「それ〔ファルスのシニフィアン〕は、まさに分析家としての我々に対して、それが幻想《ファンタスム》として存在する場所を示唆しているわけですが、聖体のパンのイメージのさらに先のところでそれが投射されるときには話は別です。／〔…〕確かに、宗教生活は強迫症者において、症状の染み込んだ、深く手を加えられた形で現れてきますが、この宗教生活、特に儀式的な生活は、ある種の奇妙な符合によって、強迫症者の症状に、それがたやすく流れ込むような畝溝や鋳型を与えるのにぴったりのものとなっているのが分かります。とりわけキリスト教においてはそうです。〔…〕フロイトは、鼠男であれ狼男であれ、キリスト教のもとで育った強迫症者と出会うたびに、彼らのたどる変遷及び彼らが持っている精神構造の両面において、キリスト教が持つ重要性を十分に明らかにしてきました。キリスト教が、その信仰箇条によって、驚くべき、大胆な——これは、控え目に言えばということです——厚かましい解決を我々にもたらしたのを見ないわけにはいきません。その解決とは、ある一人の受肉した人間、人神に、生それ自体の上にその作用が徴しづけられているようシニフィアンの機能を 引き受けさせる、というものでした。受肉した「言葉」としてのキリスト教の「ロゴス」は、人間とパロールのさまざまな関係の体系に明確な解決を与えていますし、受肉した神が御言葉と呼ばれるのには、それなりの訳があるわけです」（p. 379f.）「キリストと、パロールの場としての〔大文字の〕〈他者〉との同一視〔…〕。患者は、キリスト像を踵で踏みつぶします——忘れてはなりませんが、キリストはここでは一つの対象、つまりキリストのかけられている十字架によって具体化されており、また、この場合は、それが全体としてファルスであるということがあり得るのです。このことは、とりわけ、観察によって与えられる細部を逐一読んでゆくならば、必ずや我々に強い印象を与えるものです」（p. 300） [↑](#footnote-ref-23)
5. 「その数行先で、この強迫症者の主要な宗教的主題設定に関する重要な詳細が指摘されますが、それによると、彼女の力トリック教育を受け持っていたのは、もっぱら彼女の母であり、その教育は義務と強制という性格以外のものをけっして持ってはいなかったということです。母との葛藤が霊的な平面へと向けられた、というふうにも述べられています。この点については議論いたしませんが、それは、とても重要な事実です」（p. 299） [↑](#footnote-ref-24)
6. 「観察のなかで言われているのは、この女性が「ペニス羨望 Penisneid」に取りつかれている、ということです。それでもいっこうに構いませんが、ならばどうして、我々に紹介された彼女の最初の強迫観念が、梅毒にかかったという強迫的な恐れなのでしょうか——彼女はそのために、長男の結婚に反対したのであり、これは無駄に終わったと述べられていますが、私はこの長男のことを、彼が観察のなかでずっと帯びている意味作用《シニフィカシオン》の故に、皆さんの前で大いに引き合いに出しました。／〔…〕男性の強迫症患者に見られるのは何でしょうか。それは、病気を感染させられたり、させたりする恐れですが、これについては、我々の普段の経験が、それが彼にとってどういう点において重要なのかを教えてくれます。男性の強迫症者は、一般に、いわゆる性病の危険について非常に早くから教えられていて、多くの例では、その事実が自分の心理のなかでいかなる場所を占め得るか、皆が知っています。いつでもそうだとは申しませんが、そうした恐れはしばしば、合理的な範囲を越えていると解釈されます。〔…〕強迫症者は、リビドーの次元における自分の衝動的な行為が生み出すかもしれないあらゆることについて、強迫観念に強く悩まされ続けています。我々はと言えば、リビドー的欲動の下に透き見える攻撃的衝動をそこに認める習慣が身についていますが、こうした攻撃的衝動が、いわば、ファルスを何か危険なものにしています。／患者はファルスに対して自己愛的《ナルシシック》な要請の関係にある、我々がこういう考えだけで満足していますと、この最初の〔梅毒の〕強迫観念の理由を説明するのが、たいへん難しいことのように見えます。なぜでしょうか。それはまさに、この水準では、この女性はファルスを、男性のファルスと厳密に等価な仕方で利用しているからです。つまり、彼女は息子を媒介として、自分を危険なものと見なしているのです。彼女はその際、ファルスを自分の延長部分として与えるわけですが、これはつまり、どんな「ペニス羨望 Penisneid」も彼女を引きとめることはない、ということです。**彼女はファルスを息子という形で持っている**、本当にそれを、ファルスを持っているのです〔＝ファリック・マザー〕。彼女は、男性患者たちと同じ強迫観念を、まさにこの息子の上に結晶化させていたわけですから」（p. 374ff., 強調引用者） [↑](#footnote-ref-25)
7. 「最初の強迫観念の一つはとても面白いもので、両親のベッドに留め針を入れるのではないかという恐れなのですが、何のためにそんなことをするのでしょうか。これは母を刺すためであって、父を刺すためではありません。これが、ファルス的なシニフィアンが出現する最初の水準です。ここではそれは、危険な、罪あるものとしての欲望のシニフィアンです」（p. 378） [↑](#footnote-ref-26)
8. 「去勢コンプレックスの目立った現れは、結局次のように要約されます。つまり男性、雄は、それを持たないということを基底として初めてファルスを持つことができるのですが、まったく同じことが、女性にも現れています。つまり**女性は、それを持っているということを基底としつつ**、ファルスを持たないのです。さもなければ、どうして女性がこの還元不可能な「ペニス羨望 Penisneid」によっていきり立つ〔enrager, ひどく悔しがる〕ことがあるでしょうか。「neid」が単なる願望の意味ではなく、文字通り、私をいきり立たせるという意味であることを忘れないでください。このもともとの「neid」のうちには、攻撃性と怒りのあらゆる伏在があります〔…〕」（p.303, 強調引用者） [↑](#footnote-ref-27)
9. 「この節で著者は、間違いなく存在している両親の関係の不均衡を我々に伝え、母を前にしているときの、父のいわば虐げられて、落ち込んだ面を強調しようとしています。そうした母は男性的であったかもしれません、というのも、患者が、ファルス的な属性が何らかの名目でこの母に結びつけられなければならないとしていることが、そのように解釈されているからです」（p. 376）「〔ルネの〕死の要求とは、母自身の要求なのです。母は自分自身のうちにこの死の要求を抱いていて、憲兵班長だった不幸な父という人物の上にその力を及ぼすのですが、父の方は、患者が最初に語った善良さや優しさにもかかわらず、一生の間懊悩し、落ち込み、無口なままで、ついに母の厳格さに勝てず、妻がプラトニックだった初恋に対して抱いていた愛着を克服することもできず、嫉妬に苦しんで、沈黙を破るときには、いつも突然、結局は必ず彼の負けに終わる激しい場面を引き起こしていました。誰一人として、 母がそれに一役買っているとは思ってもいなかったのです。／それは、いわゆる去勢する母という形で表現されています。おそらく、もう少し注意して、ここでこの男性〔父〕にとって問題なのは、去勢以上に、彼にとって母がそうであったらしい愛する対象の剝奪と、彼においてそうした抑うつ態勢が成立していることであるのを認めるべきところでしょう。フロイトは我々に、この態勢を、自分自身に対する死の願望によって規定されたものとする見方を教えています。ではいったい、それは何を目指しているのでしょうか——それは、愛され、そして失われた対象にほかなりません。要するに、死の要求は主体の前の世代に、既に存在しているのです。では、それを具現化しているのが母なのでしょうか。／この死の要求は、主体〔ルネ〕においては、エディプスの地平に媒介されています。この地平は、死の要求が直接性においてではなく、パロールの地平に現れるのを可能にしています。死の要求がこのような仕方で媒介されていなかったとすれば、我々は一人の女性強迫症者ではなく、精神病者を見ることになったでしょう。これにひきかえ、父と母の関係においては、この死の要求は主体にとって、父への尊敬とか、母が父を権威や法の支え手の位置に置いているといったことを示すようないかなるものによっても、媒介されてはいませんでした。死の要求は、主体が両親の関係のなかでそれが実際に働くのを見た範囲で言えば、父に対して直接に働く死の要求でした。父はそれの攻撃性を自分自身に向け換え、そこから懊悩や聾に近い状態や、抑うつが生まれました」（p. 377f.） [↑](#footnote-ref-29)
10. 「まずは母との関係ですが、これについては、深い、たいへん重要な関係であり、現実の患者と本当に密着していると言われています。母と父とのさまざまな関係が知らされ、これらはいくつかの仕方で示されていますが、とりわけ、初めての恋、そのうえプラトニックだった恋への妻の愛着に、父が打ち勝つことができなかったという仕方で示されています。こういうことが観察のなかで指摘されるためには、母は、ある位置を占めていたのでなければなりません。／患者の母に対する関係は、我々にこう提示されています——患者は母を、あらゆる点でこのうえなく好意的に判断しており、父より利口であると考え、患者は母のエネルギーに魅了されている、などです。「母が稀にくつろいで いたときには、彼女は言うに言われぬ喜びで満たされていた（…）。患者はいつも、妹の方が母に気に入られていると思っていた（…）。また母とのそうした結びつきのなかに割り込んでくるあらゆる人間は、彼女がその死を願う対象となっていたのであって、それは、妹の死の欲望に関する、夢や幼年期の重要な材料が、やがて示すことになる通りである」。／問題になっているのは、私が既に強調した、患者と母の欲望との関係であるということが、以上で十分に示されたのではないでしょうか。欲望の問題は、患者の人生に早い時期から入り込んできており、このことは、この強迫症の女性の生活史に、特にはっきり現れています。この欲望は次のような点に行き着きます。すなわち、患者にとってくっきりと姿を見せる目的というのは、あれやこれやのものを持つことではなく、まずは母の欲望の対象であること〔…〕なのです」（p. 302） [↑](#footnote-ref-30)
11. 「ここのところはまさに重要で、皆さんは単に強迫神経症に限らず、別のところでも、これに出会うでしょう。こうした母娘の強い絆、この種の結びつきは、我々が分析の経験のなかで、どのような視角からその影響力を見るのであれ、我々を人間の間の肉体的な区別の彼方に向かうような現象の前に、いま一度連れ戻すことになります。そこで表現されているのはまさに、死の要求と要求の死を等価なものにしているような曖昧さ、あるいは両価性です〔…〕／しかし、観察は、それがすべてでないことを我々に示しています。死の要求とは、母自身の要求なのです。母は自分自身のうちにこの死の要求を抱いていて、憲兵班長だった不幸な父という人物の上にその力を及ぼすのです〔…〕」（p. 377） [↑](#footnote-ref-31)
12. 「我々は、ファルスがこうした特権に値する理由を知っています——それは、**シニフィアンという資格において**なのです。一つの特別の器官にそういう特権を与えることに対して、きわめて大きな困惑があったために、著者たちは、それがほとんどすべての分析のなかに登場するにもかかわらず、とうとうそれについて語らなくなってしまいました。／これらの論文〔ブーヴェの論文を含む〕を読み直していただければ、ファルスが〔…〕幻想の次元で捉えられて〔しまって〕いるということが、あらゆるページを貫いて前面に出ている、途方もない事実であることを確認していただけるでしょう。著者の見方からすれば、強迫神経症の治療はすべて、このファルスの想像的な体内化あるいは取り込みをめぐって展開するのであり、このファルスは、あらゆる幻想が準拠している、分析家に帰せられたファルスの形をとって、分析の対話のなかに現れてきます」（p. 207, 強調引用者） [↑](#footnote-ref-34)
13. 「男性の場合でも女性の場合でも、去勢の問題に対する解決は、ファルスを持つか持たないかというジレンマをめぐってのものではないということを、彼は理解していませんでした。というのも、主体がいずれにせよ認めなければならない一つのことがあり、それは彼がファルスでないということなのですが、主体がこのことに気づいたとき、つまり主体が分析において、ファルスでないことに気づいたときに初めて、主体は、それを持っていても持っていなくても、自分の自然的な立場を正常化することができるようになるからです。これが最後の段階、究極のシニフィアン的関係であって、これを中心として、ファルスのイメージがシニフィアン的平面の水準で果たすようになる役割によって生み出される、想像的な袋小路は解決され得るのです。／まさにこうしたことが、我々の患者に起きるわけですが〔…〕、今日皆さんに引用してきたもののなかには、完全にそれと認めることができるような仕方で、靴の幻想が現れてきています」（p. 304） [↑](#footnote-ref-35)
14. 「〔死の要求を〕まずそれがもともとある場所に位置づけるようにしましょう。つまり、それが分節化される場所にではなく、**それが主体の要求のあらゆる分節化を妨げている場所に**位置づけるようにしよう、ということです。死の要求はそこで、主体がたった一人でいるときにも、分析を始めるときにも、そしてまた、この場合に我々の分析家が記述しているような混乱のなかにいるときにも、強迫症者のディスクールの邪魔をするのです。実際、被分析者の女性は、分析の初めに、話すことができないという態度を見せていました。それは、非難や侮辱、さらには患者が医者に向かって話すのを妨げているあらゆるものを述べ立ててみせることによって表現されています——「お医者さんが仲間うちで、患者を馬鹿にしているのはよく承知しています。あなた方は、私よりも学識がありますものね。女性にとって、男性にお話しするのは不可能なのです」。／堰を切ったような非難ですが、これは、パロールの活動に相伴う、単純な分節化の困難の出現を示しています。／〔…〕死の要求は〔大文字の〕〈他者〉の場所で、〈他者〉のディスクールにおいて表現されなければなりません。これはつまり、その根拠を求めるべき先はいかなる生活史でもない、ということであり、例えば、何らかの欲求不満のためにその死を願う対象であったかもしれない母にかかわるような生活史ではないということです。死の要求が〈他者〉にかかわるのは、内的な仕方によります。この〈他者〉が要求の場所であるということ、このことが実際に、**要求の死**を含意しています。死の要求が強迫症者においてなされるときにはつねに、我々がここで要求の死と呼んでいるような種類の破壊をそれ自体でもたらします。死の要求は、果てしのない揺れの運動を続けなければならず、そのせいで、死の要求がその分節化に取りかかるやいなや、その分節化は消えてしまいます。まさにこのことが、強迫症者の態勢《ポジション》をはっきり示すことの難しさの根底をなしているのです。／この欲望は、それ自身では**取り消されて**〔annulée〕いますが、その場所は維持されています。我々は、この欲望の特徴を「**否定 Verneinung**」によって表しました。これは、欲望は表現されはするものの、否定の形でなされるためです。これが実際に現れるのは、被分析者が、「そういうことを考えているというわけではないのですが」と言ったあとで、我々に対する攻撃的で、非難をこめた、軽蔑的な欲望をはっきりと述べるようなときです。彼は、もちろんそこで実際にその欲望を表現しているのですが、彼はそれを、否定された形でしか表現できません。ところで、欲望のこの形は、それが否定されているのに、それでもやはり罪責感と関連しているというのは、どうしてなのでしょうか」（p. 368f., 強調引用者） [↑](#footnote-ref-36)
15. 「さて、被分析者がこのとき何と答えたかを見てみましょう——「私がきちんとした身なりをしているとき」——私がきれいな靴をはいているとき、とご理解ください——「男性たちは、私を欲しがりますが、私は、本当にとても喜んでこう思います、「ほらまた、むだ骨を折ろうとしている人たちがいるわ」。私は、彼らがそれで苦しむかもしれないと想像して、満足します」。要するに、彼女は、分析家を非常に堅固で、経済的《エコノミック》な場所へと連れ戻すのです。つまり、彼女の、男性に対する関係のなかにファルスに対する関係があるとすれば、それはどんな関係だろう、ということです」（p. 301） [↑](#footnote-ref-37)
16. 「この女性患者は転移の練り上げの途中で〔…〕自分はファルスを持っているのだという想念を募らせ始めます。彼女が強調しているのは、衣服の形でそれを持ちたい、男性たちの欲望を刺激し、またそれのおかげで、彼女がはっきりそう言っているように、男性たちをやがて彼らの欲望において 失望させることのできる、そうした衣服の形で、それを持ちたいということです。〔…〕いずれにせよ、このとき患者が明らかにしているのは、次のようなことです。つまり、彼女が、自分が持っていないのを完全に知っているものを、持っているように見せたいと望むとき、そこで問題になっているのは、彼女にとってはまったく別の価値を持つ何かなのだ、ということです。私はこれを、仮装《マスカラード》の価値と呼びました。彼女はまさしく、自分の女性性を一つの仮面《マスク》にしています／ファルスが彼女にとって欲望のシニフィアンであるということから、問題なのは、彼女がその外見を呈しているということ、彼女がそれであるように見えるということです。問題なのは、彼女が一つの欲望の対象であるということであり、彼女が自分でも、失望させることしかできないということがよく分かっているような、欲望の対象であるということです。彼女は、分析家が彼女に、問題になっているものをファルスの所有の欲望として解釈してみせたときに、これをはっきりと述べていますが、このことは、我々にいま一度、〔大文字の〕〈他者〉の欲望の対象である〔être〕ことと、その徴し《マーク》を帯びている器官を持つ〔avoir〕か持たないかということの間に存する相違を示すものとなっています」（p. 304f.） [↑](#footnote-ref-38)
17. 「あなたは私が持っている分析家のファルスを破壊したいのだ。それでは、私はあなたにそれを与えよう」とこの分析家は言います。別の言い方をすれば、治療は、分析家が幻想的にファルスを与え、ファルス所有の欲望に同意することとして理解されてしまっています。しかし、問題なのはそういうことではありません。この点について与え得る証拠の一つとして、［分析の］ほとんど最後の頃になっても、分析自体は続いていたように見えますが、患者はその強迫観念を、もはやそれに不安を感じなくなってはいるものの、すべて持ち続けている、と言われているということがあります。強迫観念は、分析によってすっかり認可され、そうして動かなくなってしまっています」（p. 306） [↑](#footnote-ref-39)
18. 「このときは、同様の視角からファルスを生じさせたたくさんの夢が、考慮の埒内に入ってきています。こうした夢は、大部分の神経症で観察される典型的なものですが、そのうちの一つのなかで、患者は自分自身がファルス的なものになって、自分の乳房の片方がファルスと置き換えられたり、ファルスが乳房の間にあったりするのを見ることになります。これは、あらゆる分析のなかで一番頻繁に見ることができる、夢の幻想《ファンタスム》の一つです」（p. 381） [↑](#footnote-ref-40)
19. 「我々はここで、「ペニス羨望 Penisneid」を云々するだけで満足することができるでしょうか。ファルスとの関係が、ここでは別の次元に属しているのは明らかではないでしょうか。ファルスがある露出的な関係に関連しているのを、夢それ自体が示していますが、この露出的な関係は、ファルスを持っている者たち、彼女とともに舞台の上にいる他の男たちを前にして展開されるのではなく——舞台の上の青、白、赤の紙ちょうちんは、言うも愚かなことですが、あらゆる種類のさまざまにみだらな背景のことを思い起こさせます——母の前で展開されているのです」（p. 382）「そこで、我々はこのような定式を手に入れます——そもそもの欲望とは、「私は、彼女すなわち母が欲望するものでありたい」ということである。私がそれであるためには、私はさしあたり彼女の欲望の対象であるものを、破壊しなければなりません。／患者は、母の欲望であるところのものでありたいのです。治療においてこの患者が理解するように仕向けなければならないのは、男性はそれ自身においてこの欲望の対象であるわけではないこと、男性は、女性以上にファルスであるるわけではないことです。その一方で、男性としての夫に対する攻撃性を作り上げているのは〔…〕彼女は夫がファルスである、夫がファルスを持っているのではなく、ファルスであると考えているということです。まさにこの資格において、夫は彼女の競争相手となり、彼女が夫との間に取り結ぶ関係は、強迫的な破壊によって徴《しる》しづけられているのです。／強迫症の構造の本質的な形態に従えば、この破壊の欲望は、彼女にはね返ってきます。治療の目標点は、彼女に、「あなたもまたファルスでありたいと望んでいる限り、あなた自身、あなたが破壊したいと望んでいるものになっているのです」ということに気づいてもらうことです」（p. 305） [↑](#footnote-ref-41)
20. 「壮挙は一つの力の行使、力技〔tour de force〕であり、〔大文字の〕〈他者〉を喜ばせるための手品である」（p. 255）「例えば、強迫症者のさまざまな壮挙〔exploits, 快挙・大手柄〕についてお話ししたことがありましたね。この壮挙とは何のことでしょうか。壮挙が存在するためには、少なくとも三人がいなければなりません。というのも、ひとはたった一人で壮挙を行うことはないからです。壮挙に類似した何かが存在するためには、つまり勝ち取られた成果が、「大活躍 sprint」が存在するためには、少なくとも二人がいなくてはなりません。それから、**記録し、証人となる誰か**が存在することも必要です。壮挙のなかで強迫症者が獲得しようとしているのは、まさしく、我々が先ほど **〔大文字の〕〈他者〉の許可**と呼んでいたものです〔…〕。しかし、彼が獲得しようとしている満足は、彼がその許可に値している領域上に分類されることはまったくありません。／〔…〕／〔…〕その理由は、本当の危険が存在するところという意味での死が、**彼が挑んでいるように見える敵対者のなかにではなく**、まったく別のところにあるからです。それはまさしく、**見えない証人の側、観客として存在する大文字の〈他者〉の側にあります**。この観客は、中立の立場をとって、シュレーバーの妄想のなかのどこかにある表現を用いるならば、「まったく手ごわいウサギだ！」と主体に言うような観客なのです。この叫び、**やられたということを示す**こうしたやり方は、暗黙の、潜在的な、願望されたものとして、壮挙のあらゆる弁証法のなかにも見出されます。彼がはっきり見せている様子、貫禄、スポーツ、多かれ少なかれ冒された危険のさまざまな効果のなかに、実際にはいかなる種類の本質的な危険も存在しないのは、まさしく、彼がその人物の身になってみることができるからです。彼が自分の相手にしている他者とは、結局のところ、彼自身であるところの一人の他者にすぎません。そしてまた、この他者はつねに既に、彼がどのような側から物事を見ているのであれ、いずれにしても彼に棕櫚の葉［勝利の栄冠］を残しておいてくれます。／しかし、重要な人物とは、その前でこうしたことのすべてが生じるような〔大文字の〕〈他者〉です。どうしても守らなければならないのはこの〈他者〉であり、壮挙が記録され、その歴史が記入される場なのです。この地点は、どうしても保持されなければなりません」（p. 250ff., 強調引用者） [↑](#footnote-ref-42)
21. 「観察がずっと進んだある時期に、患者は分析家に、次のような幻想を伝えます。「私はキリストの顔を踏みつぶした夢を見ましたが、それはあなたの顔に似ていました」。このときファルスの役割は、そのように言うべきだと思われている言い方をするなら、ファルスの所持者としての分析家と同一視されているわけではありません。分析家がファルスと同一視されているとすれば、それは、分析家が患者にとって、転移の歴史のこの時点において、シニフィアンの効果を受肉化しているからです。つまり、治療のなかで不意に現れた、いく度かの緊張緩和の効果のせいで、患者がその地平を少しだけ余計に投射し始めるようなパロール、そうしたパロールとの関係を、分析家が受肉化しているからです。そのときこれを、同じように「ペニス羨望Penisneid」という表現で同質的に解釈するのは、患者の置かれた状況のなかのもっとも深いところにある何かに患者自身を直面させる機会を逸することになります。患者はおそらくそのとき、次のような関係に気づくことができたかもしれません。すなわちそれは、**〔大文字の）〈他者〉の要求を根本的に死の要求として引き起こしたＸ**と、彼女が、昔の恋に執着するあまり夫からも子供からも気持ちが離れてしまっている**母の欲望**という形で、堪え難い競争《ライバル》関係について持ち得たごく初期の考え方の全体、この二つを、患者がずっと昔に結び合わせて成立させた関係です」（p. 381, 強調引用者） [↑](#footnote-ref-43)
22. 「観察のなかを進んで行きましょう。もう少し先には、何が見出されるでしょうか。患者は、キリストの顔を足で踏みつぶす夢を見たと言い、その顔は「あなたの顔に似ていました」と付け加えます。連想では——「毎朝仕事に行くのに葬儀屋の前を通りますが、そこには、四体のキリストの十字架像が陳列されています。私はそれを見ながら、彼らの陰茎を踏みつけにしているような気になります。ある種の鋭い喜びと、それから不安を感じるのです」。我々はここで再び、キリストと、パロールの場としての〔大文字の〕〈他者〉との同一視に出会います。患者は、キリスト像を踵で踏みつぶします——忘れてはなりませんが、キリストはここでは一つの対象、つまりキリストのかけられている十字架によって具体化されており、また、この場合は、それが全体としてファルスであるということがあり得るのです。このことは、とりわけ、観察によって与えられる細部を逐一読んでゆくならば、必ずや我々に強い印象を与えるものです」（p. 300） [↑](#footnote-ref-44)
23. 「ある仕方で治療を続けていくうちに、この「あなた自身が、あなたの破壊したいと望んでいるものだ」が、ありそうもない、すぐにも消えそうな幻想のなかで手に入れられた、分析家のファルスの破壊の欲望に取り替えられてしまいます」（p. 306） [↑](#footnote-ref-45)
24. 「分析家はこのとき、患者において問題になっているのは、ファルスを所有したいという欲望であると患者に示唆しようとして、あらゆる手を尽くしています。これは、それ自体としてはおそらく、この分析家が言える最悪のことではないでしょう。ただし、彼〔分析家〕にとって、それは患者が男性になりたいという欲望を持っていることを意味している、という点は別です。これに対して、彼女は最後の力をふりしぼって、自分には男性になりたい欲望などけっしてないと、最後まで反対し続けました。実際おそらく、ファルスを所有したいと欲することと男性になりたいと欲することとは、同じことではありません。分析の理論それ自身が、事態が非常に自然な仕方で解決され得るということを前提としているからです。それに気づかない人がいるでしょうか」（p. 301） [↑](#footnote-ref-47)
25. 「大文字の〈他者〉の現前と、小文字の他者の現前との区別は、観察例を注意深く読んでいただければ、その進展そのもののなかではっきり分かります。例えば、皆さんは、治療の初めでは彼女は話すことが「できない ne peut pas」のですが、後になると話すことを「望まない ne veut pas」ようになるという、非常に興味深い進展にお気づきになることと思います。なぜなら、被分析者と分析家の関係が打ち立てられるのはパロールの水準においてだからであり、彼女が拒絶するのもその水準においてだからです。彼女が拒絶しているのは、彼女の要求が死の要求でしかあり得な いからだということ、分析家はそのように表現してはいませんが、しかし彼は、そのことにはっきりと気づいています。そのあとで、別のことが起こります。たいへん面白いことですが、分析家は何かが変化して、関係が改善されたという点にはっきりと気がつきます。しかしながら、彼女はやはりしゃべりません。というのもいまや、彼女は話すことを望まないからです。これら二つの違いは、話すことを望まない場合には、大文字の〈他者〉が現前している〔話すことができない場合には、小文字の他者が現前している〕ことがその理由だという点です」（p. 355） [↑](#footnote-ref-48)
26. 「治療の指導は、分析家のファルスを所有したいという欲望と、それと相関的に分析家の去勢の欲望とが問題である、という解釈に基づいています。事柄をもっと注意してよく見れば、以上のことは、観察のなかで実際にそこに現れていることをまったく表してはおりません」（p. 298） [↑](#footnote-ref-49)
27. 「一個の〔大文字の〕〈他者〉、優しい母、主体がかつてかかわった〈他者〉よりももっと優しい一個の〈他者〉〔＝分析家〕が介入して主体に言っていることがあるのですが、これは、著者が別の箇所で用いている言い方に従えば、おおよそ次のようになります。「これは私の身体、これは私の血です。このファルスについては、あなたは男性たる私を信じても構いません。これを飲み込みなさい、私はそれを許します。このファルスは、あなたに力と活力を与えるはずです。それは、強迫症の女性としてのあなたのあらゆる問題を解決するでしょう」。／実際には、結果として強迫のただの一つも消えはしませんし、強迫がただ罪責感なしに受け止められ、経験されるようになったというだけでした。これは、私がいま皆さんに申し上げていることと厳密に合致しています。それはまさに、そうした仕方での介入から当然結果するに違いなかったことです」（p. 356f.） [↑](#footnote-ref-50)
28. 「［分析の］ほとんど最後の頃になっても、分析自体は続いていたように見えますが、患者はその強迫観念を、もはやそれに不安を感じなくなってはいるものの、すべて持ち続けている、と言われているということがあります。強迫観念は、分析によってすっかり認可され、そうして動かなくなってしまっています」（p. 306） [↑](#footnote-ref-51)
29. 「さて、こうした実践は、強迫神経症に固有の治療法において、ファルスの、つまり分析家のファルスの想像的な体内化の幻想を軸と考えることへと導かれます。ある種の損耗の効果と考えられるものによる以外は、逆転がどういうとき、なぜ起こるかについてはよく分かりません。実を言えば、それは少しばかり謎めいています。「徹底操作 working through」、治療のしつこい継続〔insistance〕によって、ある時、ファルス的幻想の体内化が、患者に対して、まったく異なった価値を持つものとして現れる、と言われます。さまざまな幻想のなかでは、危険でいわばはねつけられた対象の体内化であったように見えるものが、突然性質を変えて、受容を生じせしめ、歓迎される対象、力の源泉たる対象になります」（p. 209） [↑](#footnote-ref-52)
30. 「分析家は、患者にとってのファルスの意味を変えました。分析家は、ファルスを患者にとって正当なものとしたのです。このことはおおよそのところ、患者に、自分の強迫観念を愛することを教えるという結果になりました。この治療の総括として我々に与えられるのは、まさしくそれです——つまり、さまざまな強迫観念は衰えなかったが、ただ単に、患者はもうそれらに対して罪責感を持っていない、というわけです。この結果は、ある介入によってもたらされるわけですが、この介入はとりわけ、さまざまな幻想をつらぬく横糸に中心を置いていますし、また、それらを男性との競争関係の幻想として価値づけるということに中心を置いています。この競争関係は、母に対して向けられた何だかよく分からない攻撃性が移し替えられたものと考えられていますが、その攻撃性の根源にはまったく手が 届いておりません。／そしてこうなります。すなわち、分析家の行う、認可を与えるという操作は、さまざまな強迫観念をつらぬく横糸を、根本的な死の要求から切り離してしまうのです。このような操作によって、結局は幻想が認可され、正当化されますが、正当化はひとまとめにして行うほかありませんから、性器的な関係の放棄が、そのものとして成し遂げられます。患者が自分の強迫観念を愛することを学んだそのときから、患者に起こることのうち最大限の意味作用が備給されるのは強迫観念であるという、まさにその限りにおいて、我々は観察の最後に、気持ちを非常に高揚させるような、あらゆる種類の直観が展開されるのを見ることになります」（p. 382） [↑](#footnote-ref-53)
31. 「この治療は実際、力と善良さの、ある種の陶酔へと達します。これはほとんど躁的な陶酔であり、想像的な同一化によって終結する治療の常態であり、そのしるし《シーニュ》です。これはつまり、治療が行ったのはまさしく、既に強迫のさまざまなメカニズムのなかに見出されていたもの、つまり想像的な水準におけるファルスの吸収または体内化、これは強迫のメカニズムの一つですが、これをその最終的な帰結にまで押し進め、暗示的な同意という道を通して容易にすることにほかならなかった、ということです。防衛のさまざまなメカニズムのなかから選ばれたこの同じ道において、こう言ってよければ、解決が与えられます。そこに、いまや良き母親であるもの、すなわちファルスの吸収を可能にする母親であるものの同意が付け加えられます。／我々は、神経症の解決として、その構成要素の一つにすぎないものが、単に極限まで推し進められただけのもの——要するに、より成功した、他のものから解放された症状——に甘んじなくてはならないのでしょうか。私は、これですっかり満足できるとは思いません」（p. 358） [↑](#footnote-ref-54)
32. 「この女性患者は、どうするのでしょうか。観察が、まったく無知のままに語っているところでは——彼女は長男に対して全力で干渉します。彼女はいつも、この息子をひどく恐れていましたが、それは実をいえば、彼はただ一人、今度はあなたの方がただちに分析を受けに行かなければならない、と彼女が言っても、その男性的な反発をうまく鎮めることがついぞできなかった男性であったからです。これは、いったいどういうことでしょうか——それは、状況の解決法であると分析家が信じているファルスを、分析家自身が優しい母の立場をとって患者に与える限り、患者はそれを分析家に返す、ということ以外にはありません。彼女が実際にファルスを持つ唯一の地点において、彼女はそれを彼に返してよこします。これで貸し借りなし、というわけです」（p. 306）「逆に、既に申し上げたように、女性患者が治療の終わり、分析を中断されたところで、分析家のところに自分の息子をよこしたのにはびっくりさせられます〔訳者注：この経緯は当論文には記されていない〕。この行動は、かなり驚くべきものです。なぜなら我々は、患者がその生涯を通じて、この息子を前にすると聖なる恐怖を覚えてきた、と聞かされていたからです。分析家がそれについて描き出してきた文脈や、さまざまなイメージに従えば、この息子との間にはずっと、ごく控え目に言っても、一つの問題があったということが、はっきりと感じ取られます。／この息子が治療の終わりに分析家に差し出されたということ、これはまさに、やり損なわれたものとは何かをはっきりと示している、アクティング・アウトではないでしょうか——つまりそれは、ファルスが力のアクセサリーとはまったく異なったものとなり、男性と女性の間に起きることがそこで象徴化されるようなシニフィアン的媒介となるこの点においてやり損なわれたものが何かを、はっきり示しているのではないか、ということです。フロイトは、父親に対する女性の関係において、ファルスの象徴的な贈与の欲望と、それに続いてファルスに取って代わる子供との間に等価関係があるのを示しはしなかったでしょうか。これはつまり、子供がここで、治療において加工されたり解明されたりすることのなかった場所、つまり象徴的な場所を占める、ということです。主体はその意に反して何か別のことが実現されるべきであったということを、我にもあらず、何かが分析のなかでやり損なわれたときのアクティング・アウトと同一のはっきりと無意識的な仕方で示しているのです」（p. 357f.） [↑](#footnote-ref-55)
33. 「他者に対する関係という概念は、**欲望を要求に還元する**傾向のある一つの横滑りによっていつも持ち出されます。〔…〕分析家たちのほとんど全員が一致して、現在では、「献身 l’oblativité」——つまり、他者の欲望をそれ自体として承認すること——への到達を、彼らが性器的成熟と呼んでいる主体の幸福な実現の頂上、頂点として捉えています。〔…〕これはまさしく、欲望の問題において実際に解決されるべきものとしてある事柄を、みすみす取り逃すということなのです。／要するに、この道徳教化的な観点から我々に提示されている「献身」という言葉は、言葉をゆがめて使うことなしにこう言えると思いますが、一つの強迫的幻想であると思います。〔…〕さて、強迫症者の手の届く範囲にある錯覚、幻想とは、要するに、〔大文字の〕〈他者〉それ自体が彼の欲望に同意している、という幻想です。／このことはそれ自体、極端な困難を含んでいます。というのも、〈他者〉が同意していなくてはならないのだとすれば、それは何らかの満足に対する応答、要求に対する応答とはまったく異なる仕方によってでなければならないからです。しかしすべてを考え合わせると、このことは、問題を巧みに避け、結局は意見が一致しさえすればそれで十分である——生活のなかで幸福を見出すためには、自分自身がその対象であったような欲求不満を、他人たちにぶつけなければそれで十分である——と考えて、短絡的な解決を与えるよりは望ましいことです」（p. 247ff., 強調引用者） [↑](#footnote-ref-56)
34. 「我々の見方はおそらく、この著者より少し厳しいものとなっています。著者はある女性患者から、数か月の治療のあとで次のような告白を受け取ったので、目標に到達したといって満足しています——「私はすばらしい経験をしました。夫の幸福を喜ぶことができたのです。私は、彼の歓びを見てとても感動しました。彼の喜びが私の喜びになったのです」。／これらの言葉をよく検討してみてください。これらの言葉に価値があるということは確かです。それは、この女性患者の以前の冷感症が取り除かれることをまったく含意しない経験を実によく表現しています。夫の幸福を喜ぶことができるというすばらしい経験はよく観察されることですが、だからといって、患者がどういう仕方にせよオルガスムに達したことを意味するものではありません。患者は、なかば冷感症のままだと言われています。ですから、著者がそのすぐあとで、「これは成人の性器的関係の性格を、もっともよく示しているのではないだろうか」と付け加えているのには、やはり少し驚かされます。／成人の性器的関係という概念は明らかに、こうした見方全体に対して、めくら窓的な構築物というその特徴を与えています。成人の性器的関係、と言われていますが、近づいてよく見ると、これが何を意味するのかはよく分からなくなってしまいます」（p. 210f.） [↑](#footnote-ref-57)
35. 「分析家は、患者にとってのファルスの意味を変えました。分析家は、ファルスを患者にとって正当なものとしたのです。このことはおおよそのところ、患者に、自分の強迫観念を愛することを教えるという結果になりました。この治療の総括として我々に与えられるのは、まさしくそれです——つまり、さまざまな強迫観念は衰えなかったが、ただ単に、患者はもうそれらに対して罪責感を持っていない、というわけです。この結果は、ある介入によってもたらされるわけですが、この介入はとりわけ、さまざまな幻想をつらぬく横糸に中心を置いていますし、また、それらを男性との競争関係の幻想として価値づけるということに中心を置いています。この競争関係は、母に対して向けられた何だかよく分からない攻撃性が移し替えられたものと考えられていますが、その攻撃性の根源にはまったく手が 届いておりません。／そしてこうなります。すなわち、分析家の行う、認可を与えるという操作は、さまざまな強迫観念をつらぬく横糸を、根本的な死の要求から切り離してしまうのです。このような操作によって、結局は幻想が認可され、正当化されますが、正当化はひとまとめにして行うほかありませんから、性器的な関係の放棄が、そのものとして成し遂げられます。患者が自分の強迫観念を愛することを学んだそのときから、患者に起こることのうち最大限の意味作用が備給されるのは強迫観念であるという、まさにその限りにおいて、我々は観察の最後に、気持ちを非常に高揚させるような、あらゆる種類の直観が展開されるのを見ることになります」（p. 382） [↑](#footnote-ref-58)
36. 「我々は観察の最後に、気持ちを非常に高揚させるよう な、あらゆる種類の直観が展開されるのを見ることになります。／〔…〕きっとそこに、ある人たちが分析の終わりの現象として強調したことのある、自己愛的な感情の吐露の様式が見出されるでしょう。とはいえ、著者はこの点にはあまり幻想を抱いていません。著者はこう書いています。「陽性転移は、非常に強く前性器期化されたエディプスのさまざまな特徴によって明確になった」。そして、よく用いられる言い方で言えば、真に性器的な解決の可能性に関する幻想をほとんど持たず、きわめて未完成な一片の覚え書きで話を終えています。／この結果と、解釈の様態そのもの、つまり解釈が要求の解明を目指すというより、むしろここではその縮減を目指しているということ、これらの間の緊密な相関関係が見て取られているようには、まったく思われません。このことは、現在ではふつう、攻撃性の解釈の重要性が強調されているだけに、いっそうパラドクスをはらんでいます」（p. 383f.） [↑](#footnote-ref-59)
37. 「相手の身になることからなっている、〈他者〉に対する関係の秩序とは、一つの魅力的な横滑り《グリスマン》であり、これは分析家が、攻撃的な関係のなかで**小文字の他者、自分の同類**にまさに向き合うとき、まったく自然に、こう言ってよければ彼をいたわる立場へと移行しようという気になる場合には、いっそう魅力的な横滑りだということになります。他者をいたわるということ、これこそが、一連の儀式ばったもの、用心、迂回、要するに強迫症者のあらゆる術策の根本にあります。もし、それが彼のさまざまな症状において現れていたものをなんとか一般化し〔…〕、そして、それを道徳教化的に拡大解釈して、献身的な出口と呼ばれているもの、つまり〔大文字の〕〈他者〉のさまざまな要求に対する従属を、彼のさまざまな問題の結末及び出口として彼に提示するためということならば、こうした迂回につきあうには及びません。経験が示しているように、それは実際には、ある症状を別の症状、非常に深刻な症状に置き換えることでしかありません。というのも、それは、欲望の問題の再出現を——それとは別の、多かれ少なかれ問題をはらんだ形で——必ずや引き起こすことになるわけですが、この欲望の問題は、これらの道によっては、けっして解決されたことがなかったし、また解決されることができないであろうからです。／こうした見方からいえば、強迫症者が自分自身で見出す道、彼が自分の欲望の問題の解決を探し求める道〔たとえば「壮挙 exploit」〕は、〔献身に比べれば〕はるかに適切なもの——ぴったりしたものではないにせよ——であると言うことができます。なぜなら、そこでは少なくとも、この問題がはっきりした仕方で読み取られるからです」（p. 249f.） [↑](#footnote-ref-60)